松本市美術館 news［あーとふる］
MATSUMOTO CITY MUSEUM OF ART
2017.10 Vol.54

artful

/art Exhibition Guide

《王妃像 No.1》1984年 松本市美術館蔵

［松本市市制施行一一〇周年記念／松本市美術館開館一五周年記念］

彫刻家・細川宗英展

人間存在の美

Munehide Hosokawa, Sculptor The Beauty of Being Human

2017年10月7日［土］～11月26日［日］

休 館 日／月曜日（祝日の場合は次の最初の平日）
開館時間／9:00～17:00（入場は16:30まで）
観 覧 料／大人1,000円、大学高校生・70歳以上の松本市民600円、中学生以下無料
※20名以上の団体は各100円引き ※障害者手帳携帯者とその介助者1名無料
【リピート割引】大人600円、大学高校生・70歳以上の松本市民300円
※2回目以降の観覧料。要半券呈示。他の割引との併用はできません

**人間とは生と死との間で
さまよい離れようと思っても
離れられず、うごめき、
捨てようと思っても
捨てられぬ愛憎、
また悟ろうとあがく生の人間、
この悲しい生命ある者の姿、
ここから離れられないのだ、
という自覚を出発のもとに、
仕事をしようと思った。**

細川宗英「わが精神の風土」『細川宗英』図録より（信濃毎日新聞社発行）

彫刻家・細川宗英（1930～94年）は、1968（昭和43）年、38歳の時に第一回文化庁芸術家在外研修員として渡米した際、メキシコを旅してマヤ文明の遺跡を訪れました。廃墟の中、朽ちかけた人体レリーフの断片を見つけ、崩れかけながらも訴えかけてくる執念のようなものに心打たれ、己が求める彫刻の極を確信します。帰国後、人間像を掘り下げた「男と女」「王と王妃」のシリーズや「道元」、「地獄草紙・餓鬼草紙シリーズ」を制作。晩年には、人物と動物を組み合わせた作品や、不要物を出来る限り削ぎ落とした造形を求めました。

《追われる餓鬼》（部分）1978年 諏訪市美術館蔵

時間の流れとともに消えゆく命や風化するモノ、絶えず変化してゆく世において、根源的に変わらぬ本質や人間の存在とは何か…。戦後の20世紀という時代を生きた細川宗英は、他の芸術家が見残した大切なものを拾おうと独自の表現を追求しました。

本展は、細川の初期から晩年までの作品（彫刻、デッサンなど）約90点をとおし、創作の変遷を辿ります。厳として立体が放つ力や彫刻家が作品に込めた思いを肌で感じていただきたい展覧会です。

大島 武（当館学芸員）

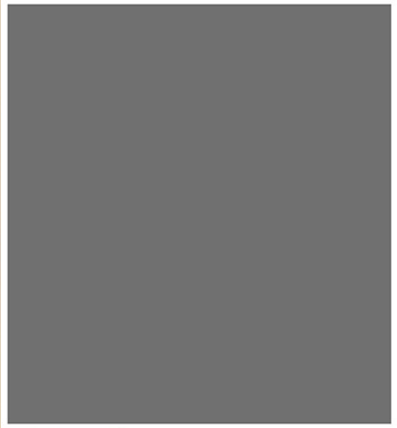
《かめ》（部分）1987年 諏訪市美術館蔵

主催／松本市美術館　共催／一般財団法人 松本市芸術文化振興財団、信濃毎日新聞社、市民タイムス、松本平タウン情報、abn長野朝日放送　特別協力／諏訪市美術館

ポルカドット号探検記

第19回

きれい？きたない？ 平安絵巻



「施薬所」国宝《地獄草紙》より 12世紀 奈良国立博物館蔵（撮影 佐々木 香輔）

何年か前、大河ドラマ「平清盛」の放映時、舞台となった兵庫県の知事が演出に注文をつけた。時代の描かれ方が「汚い」というのだったと思うが、はたして、平安末期の世相がきれいであったかどうか。

たしかに12世紀前半の国宝《源氏物語絵巻》では美麗な貴族世界が繰り広げられていた。ただし、平安末期から鎌倉時代に向け戦乱が続く時期、美術作品にはまったく新たな視点が登場する。いうならばリアリズムへの関心か。

こうした文芸思潮を導いたのが、暗君として評判が悪い後白河法皇だった。平家、源氏の新興武家を手玉に取りながら自分等の拠り所として貴族文化を存続させるために没頭した変わり者。法皇は、清盛に建てさせた今の三十三間堂、蓮華王院宝蔵に絵巻物を大量にコレクションしていたことで知られる。ほとんどは散逸したが、伝世作品として《伴大納言絵詞》と並び《地獄草紙》、《餓鬼草紙》がある。

この草紙に描かれた、昏い世界に蠢くあからさまな人間の姿態は、たしかにきれいではない。仏教の六道思想を分かりやすく図解したとの解釈はあるが、一連の絵巻は単に説教のために描かれたのではないだろう。絵画としての完成度は著しく高い。画面の暗さは墨一色でなく、茶褐色の絵具を重ねた質感により奥行きが表され、そして男女と獄卒の輪郭線の何と闊達なことか。法皇気に入りの最高位の絵師が担当したに違いない。

わが国の絵画史に簡略な筆描による人体表現（戯画）が一貫してあり、北斎漫画や現代のコミックに受け継がれている。貴族や僧侶の取り澄ました肖像ではなく、市井の男女を面白おかしく描いた。だが、ここに身分を超え、人間の真実への鋭い洞察がある。誰も逃れることのできない条件に昔も今も無い。しかし、この忘れられた絵巻を現代に、しかも彫刻で再現することなど誰が思いつくだろう。今回の細川宗英展では、特異な才能をもった彫刻家の深い思索の跡をたどることができそうだ。

松本市美術館館長 小川 稔

26 Relay Essay リレーエッセイ

今、「裏側」がアツい！

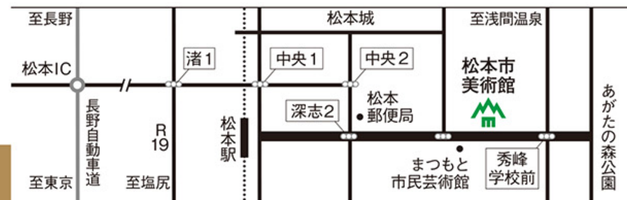
今、熱中していること。それは、刺繍である。青森地方のこぎん刺し、北海道地方のアイヌ刺繍をちょっとした時間を見つけては、一刺し一刺しすすめている。それぞれの地域独特の文様は、基本の形をさまざまに組み合わせて大きな柄をつくる。ひとつの柄が出来上がればさあ次の柄へ、と手が止まらない。文様の面白さ、美しさに心惹かれる。しかし、魅力はこれだけではない。実は、その裏側もとても魅力的なのである。丁寧な手仕事のものは、裏面とは思えないほど整っており、美しい。一見素人目に表がよくとも、私の不慣れなものは、裏を見るといい加減さがまるわかりになってしまうのである。今は裏側も美しい仕事を目指して一刺し入魂を心掛けている。

さて、話はかわって美術館でのお仕事のこと。作品の額装を必要に応じて交換する作業をすすめている。額を替えるために裏板を外す瞬間、いつも心が躍る。普段は隠れてしまっている作品の裏側には、サインや作品名、制作年、展覧会への出品歴などが記載されていることがあり、表から知り得ることのない情報がでてくる場合もある。また、その書き方も作品ごと、作家ごとに様々で、個性豊かな裏側は見ていてとても楽しい。

それは絵画作品だけでなく、彫刻もそう。現在特別展で紹介している細川宗英。その作品の裏（後ろ）を見ると、異質な突起を見つけることがある。制作過程で残った部分で、作品によって切断面が異なる。細川自身が意図して残し、ちょっとした遊び心が現れた部分ではないかという話を聞き、ついついほかの作品の裏側も探してしまう。

今、私の中で「裏側」がアツい。

堀井 真美（当館学芸員）



松本市美術館 news あーとふる
編集・発行
松本市美術館
MATSUMOTO CITY MUSEUM OF ART
〒390-0811 長野県松本市中央4-2-22 tel 0263-39-7400 fax 0263-39-3400
http://matsumoto-artmuse.jp
リサイクル適性Ⓐ この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

Workshop
ワークショップ

アートカード あれこれ

アートカードとは美術館所蔵作品の写真をカードにしたもの。気軽に扱うことができ、色々な作品を手元でじっくり見ることができます。子どもたちや、美術鑑賞に慣れていない方などに鑑賞の方法や楽しみを知ってもらうための教材として、松本市美術館でも導入しています。

アートカードの実際の使用方法は、使う人のアイデア次第で様々。トランプ遊びのように絵柄を揃えたり並べたり、お友達のお気に入り作品を当てるゲームをしたり…、更にオリジナルの使い方を考えることも楽しみの一つです。

当館にあるアートカードは、松本市美術館の作品で作られたもの と、県内の館が所蔵する作品を集めて作られた長野県版の2種類。いずれも学校等の団体への貸出が可能ですので、お問い合わせのうえ、ぜひご活用ください。

アートカードでの遊びが、美術の鑑賞を楽しむ入口となれば幸いです。

こちらでは、アートカードの使用例を2つご紹介します。

麻生 沙絵（当館学芸員）

アートカード使用例（当館学芸員が市内の学校で行う「アートおとどけ講座」の様子から）

① 似てるのどこかな？神経衰弱（美術館来館前の事前学習）

カード2枚を表にして、似ているところを発表するゲーム。班のみんなに「そうだね、似てるね」と言ってもらえたらカードゲットです。一見全く似ていないカードも出てくるので、作品をすみずみまでよく見て共通点を探します。

② 額縁と展覧会を作ろう（学芸員のお仕事紹介）

好きな作品のカードを選び、その絵に似合う額縁を作ります。最後は模造紙の上で展覧会を開催。絵に額縁をつける、展覧会を考える、などの学芸員の仕事への理解と、班のみんなが選んだ作品にぴったりの展覧会タイトルをつけることを通して、自発的な作品鑑賞を促す活用方法です。

身近なアート

印影

紙や布などに印章を押した跡を〝印影〟と呼ぶ。デスクに回ってくる書類に押された同僚の印影は、どれも大きさ、書体、インクの滲みが微妙に異なっており、面白い。どこが違うのか見比べてしまうこともしばしば。

日本で現存する最古の印章は、西暦57年ごろに中国から日本に贈られたとされる、「漢委奴国王」の金印だと言われている。以来、時代の変遷とともに浸透し、江戸時代には庶民の間でも広く使われるようになった。現代でも日常生活を送る上で欠かせないアイテムのひとつであろう。

美術作品にも見られる印影。特に書や水墨画の作品に押されたその朱色は、墨汁の黒と地の白に良く映える。モノクロ図版でしか見たことのなかった書作品を直に目にした時、本物の作品が持つその迫力だけでなく、小さいながらも際立つ印影の華やかさに驚いた。

篆刻の書体がお気に入りの印章（写真左）は、数年前にとある博物館のショップで購入したもの。年賀状の仕上げに、隅っこに押印するのが、私の中ではここ数年の決まりごとだ。既存のデザインが印刷された年賀状にオリジナル感がプラスされた気分になる。小さな朱い跡が持つ、不思議な力を感じる瞬間だ。

中澤 聡（当館学芸員）

筆者愛用の印章とその印影

視る

河越虎之進《山岳展望図絵》

作品名＝《山岳展望図絵》（12点）　作者＝河越虎之進（1891～1989年）
データ＝1958～59年制作　油彩・キャンバス　サイズ＝各24.0×107.0cm

河越虎之進は、現在の松本市梓川に生まれた。旧制松本中学校（現松本深志高校）を卒業後、葵橋洋画研究所で学ぶ。東京美術学校（現東京藝術大学）西洋画科卒業後、引き続き同校研究科に在籍し、黒田清輝、岡田三郎助、藤島武二、和田英作らに師事。1927年から2年連続で帝展に入選した。その後、早稲田第一高等学院（現早稲田大学）でデッサンを教える。

1944年、崖の湯（松本市）へ疎開。北アルプスの山々と郷里を望む場所に居を構えた。日本山岳画協会に参加し、加藤水城、桂重英、古市幸利らと信濃山岳画協会を結成している。

本作は、松本市にある鉢伏山の頂から見た360度の大展望を描いたもの。画家本人が「山岳絵巻」と表現した、12面から成る山岳画である。

当時、山頂に建設された展望台を飾るものとして地元の観光関係者から制作を依頼され描き始めるが、しばらくしてもっと簡単で説明的なものをと希望され、がっかりしたという。しかしそれとは別に、自らの構想で本格的な油絵の制作にとりかかった。山頂の山小屋に泊まり込み、厳しい気象条件の中で、足掛け3年を費やして描かれた。

図版はそのうちの4面。上段の作品には乗鞍岳から穂高連峰、槍ヶ岳、常念岳が連なっている。これに続く面には白馬岳、クビキアルプスが現れ、そして下段の作品、美ヶ原とその奥に見える浅間山と続く。そこから八ヶ岳、富士山、南アルプス、御嶽山と描かれていき、12面を並べると360度につながる。珍しいかたちの作品だ。

流動する雲の一瞬をとらえ、東西南北の山々と合わせて見事に画面を構成している。これらの作品に囲まれると、自分も山頂に立って、目の前には壮大な景色が広がっているかのような感覚に。清清しい気持ちにさせてくれる作品である。

稲村 純子（当館学芸員）

開催中のコレクション展『「山の日」特集展示 山を旅する』（会期：～2017年11月5日［日］）にて展示中です。ぜひご覧ください。

美術情報図書室からのお知らせ

松本市美術館の3階にある美術情報図書室の存在を、ご存知だろうか。当館学芸員のお勧めスポットのひとつだ。美術に関係する書籍などを取り揃え、公開している。一般書籍に加え、当館で開催する展覧会に関するもの、収蔵作品に関するもの、美術関係雑誌のバックナンバー、全国各地の美術館展覧会図録などの収集に力を入れている。現在発行中の雑誌、新聞も豊富で、日々の文化・芸術関連の情報収集をするには最適の場所だ。

さらに、当館で開催中の展覧会に合わせた特別閲覧コーナーを毎回つくり、展示をより楽しんでもらえるように連携している。昨今の利用者のニーズに合わせ、草間彌生の関連書籍コーナーも設け、内容も充実。絵本も美術館ならではのセレクトなので、どんな絵本があるか見に来てほしい。

貸し出しはできないが、いつでも無料で利用できる。スタッフ常駐なので、レファレンスもお気軽に。旅の途中に、調べものに、少しあいた時間に、…と是非、足を運んでみてほしい。

稲村 純子（当館学芸員）

草間彌生が挿絵等を手がけた『不思議の国のアリス With artwork by 草間彌生』（ルイス・キャロル作 橋本君恵訳 2013年 ㈱グラフィック社発行）の大型模型を展示している。